

# Kathāvatthu にみられる正量部の諸説

池田練太郎

## 1 はじめに

部派仏教のうちで、今日接することのできる史料が最も多く存在しているのは、言うまでもなく南伝の上座部 (Theravāda) と北伝の説一切有部 (Sabbatthivāda, Sarvāstivādin) である。しかるに、現在にまでその伝統が維持されてきている上座部はさておき、かつて最大の勢力を誇ったといわれる有部でさえ、その残存する史料・文献はかなり限られており、それが研究の進展を妨げる大きな原因になっていることは否めない事実である。いまここで検討しようとする正量部 (Sāmiti, Sammitiya) については、同様のことがさらに極端にあてはまるといえよう。明確に正量部に所属する文献、あるいはこの部派に関連する文献といいうるものは、後述のように、『三弥底部論』三巻など、極めて僅かのものに止まる。ところが、インドにおける仏教思想史、殊に後期の仏教思想史を考察するうえで、この部派の占める比重は極めて重いのではないかと考えられるのである。

正量部の成立は、部派仏教における各部派の中では比較的新しいといえる。しかし、例えば、7世紀、630年ごろから12年にもおよぶインドでの滞在を了えて帰唐した玄奘三蔵 (602-664)<sup>1)</sup> は、『大唐西域記』の中で、仏教の学ばれていた場所を全部で99箇所挙げているが、その中で小乗を学ぶ所60箇所、大乘を学ぶ所24箇所、大乘・小乗兼学の所15箇所としていて、圧倒的に小乗の方が優勢であることを示し、しかもその小乗の60箇所のうち、19箇所が正量部、14箇所が説一切有部であるとして、正量部が最も盛んであった如く示している<sup>2)</sup>。また、同じく7世紀、671年から25年間にわたってインド各地を巡り、後に『南海寄帰内法伝』を著わした義浄三蔵 (635-713) も、当時のインドにおける部派を大別すると、大衆部、上座部、根本説一切有部、正量部の4部派に分けられるとし、しかもその中でも正量部が最も盛んであると述べている<sup>3)</sup>。さらに、サールナートの碑文に

よると、鹿野苑の精舎はクシャーナ朝の時代には説一切有部の所領であったが、4世紀ごろには正量部のものになったといわれている<sup>4)</sup>。

こうしたことからみて、正量部は4世紀ごろにはすでにかんりの勢力を持っており、後代に到るにしたがって次第にその勢力を拡大し、6～7世紀ごろにはインドにおける最大級の部派として存在していたと想像される<sup>5)</sup>。即ち、ここで注意する必要があるのは、この部派が勢力をもった時代と、後期大乘仏教の諸論師たちが活躍した時代とが重なり合うということである。従来研究者の間では、経量部 (Sautrāntika) が、小乗仏教から大乘仏教への橋渡しをした部派として、また後期大乘仏教の認識論に大きな影響を与えた部派として注目されてきたが、正量部は、後期大乘の論師たちの背後にあった部派として、もっと注意されてよいように思われる<sup>6)</sup>。

正量部について考察する際に、もうひとつ問題となるのは犢子部 (Vajjiputtaka, Vātsīputriya) のことである。周知のごとく正量部と犢子部が非常に近い関係にあることは論を俟たない。一般に、正量部は犢子部から分派した部派であるといわれる<sup>7)</sup>が、また時に両者は同一の部派と見做されることもあるほどである<sup>8)</sup>。こうした点については、以下にも触れていくことになる。

いま因に、正量部に所属するといわれる論書を挙げてみると、

(1) 『三弥底部論』三卷，失訳，大正 No.1649。

(2) 『律二十二明了論』一卷，佛陀多羅多造，真諦訳，大正 No.1461。

などがある。

このうち(1)のものは、Sammitiya という、この部派の名前がそのままタイトルとされている、漢訳のみに現存する論書である。このタイトルから判断して、正量部の論書であることはまず疑いのないところであろう。また、(2)のものも漢訳のみが残っている律関係の論であり、律の重要な問題を22の偈にまとめ、それに註釈を施したものであるが、巻頭に「正量部，佛陀多羅多法師造」と記されており、正量部所属の論書と見做してよいとされる<sup>9)</sup>。しかし、今日正量部の論書と認められるのは、この二つの論くらいしか存在しないのである<sup>10)</sup>。

このように、正量部に直接関連する論書は極めて限られているといえる。したがって、少しでも正量部に関する情報を有する史料から正量部説とされるものを抽出しておくことは、今後この部派に関して検討を加える際に、幾分なりとも役立つものと思われる。

(20)

Kathāvatthu にみられる正量部の諸説 (池田)

本稿ではそうした作業の一環として、取敢えず、分別上座部に伝わる *Kathāvatthu* (『論事』, KV)<sup>11)</sup> の中にみられる諸説のうち、Buddhaghosa (仏音) の *Kathāvatthu ppakaraṇaṭṭhakathā* (KVA)<sup>12)</sup> によって正量部説と明記された説を抽出し、それらにのみ限定して検討を加えることとしたい。

ところで、Buddhaghosa は5世紀ごろの人とされる<sup>13)</sup> ので、既に紀元前2世紀の末には成立していたと考えられる KV<sup>14)</sup> 中の諸説に対してコメントしたことが、どれほど正確な情報を我々に与えているかという点については幾分の疑問なしとしないが、しかし、彼の註釈を抜きにしては、KV の記述内容を限定していくことができぬ以上、あくまで KVA の記述を頼りにし、それに基づいて検討していかなばならないことは言うまでもない。

## 2 KV にみられる正量部説

KV は言うまでもなく、分別上座部の立場から他の部派の所説を批判的に扱った論書である。しかし、論の進め方は、一応のテーマごとに章を設けて議論 (kathā) を展開してはいるものの、論書の構成そのものに明確な型が認められるわけではない。また個々の論争にしても一定のパターンによって問答を反復するという、極めて冗長な形式で進められる。したがって、双方の主張が不明瞭になってしまうという欠点がある。それ故、ここでは KV 中の全 216 *Kathā* のうち、Buddhaghosa によって正量部の説であると明記されている、全体で23種に及ぶ主張を、箇条書きの形で列挙することにしたい。各項は、以下の手順で示される。

- ① 最初に KV の章をローマ数字で示し、その中の各議論のナンバーをハイフンをひいた後にアラビア数字で示す。続いて議論のテーマをパーリ語及び一応の漢字訳によって示し、その後に KV (PTS 本) のページを示す。
- ② さらにその議論を行なう、正量部を含む対論部派を KVA の指示に従って掲げ、KVA (JPTS 本) のページを示す。
- ③ 最後に各論点の要約、その他について、KV、及び KVA の記述に基づいて極めて簡潔なコメントを附すことにする。

(1)

- ① I-1 Puggala-kathā 補特伽羅論 pp. 1-69。
- ② 犢子部、正量部、仏教以外の多数の外道 (Vajjiputtakā c' eva Saṃmitiyā ca bahiddhā ca bahū aññatitthiyā, KVA, pp. 7-35)。

- ③ KV の冒頭に置かれる、KV における最も長い議論。PTS 本で約70ページに及ぶ。puggala (補特伽羅) の存在について論ずるのであるが、犢子部及び正量部は、その存在を認め、これを否定する上座部の立場と対立する。周知のように、この主張によって、これらの部派は、無我 (anattan, anātman) を説く仏教内部で極めて特殊な主張を展開する部派として注目されるのである。

## (2)

- ① I-2 Parihāni-kathā 阿羅漢退論 pp. 69-93。  
 ② 正量部, 犢子部, 説一切有部, 大衆部のある一部の者 (Saṃmitiyā Vajjiputtīyā Sabbatthivādino ekacce ca Mahāsaṃghikā, KVA, pp. 35-39)。  
 ③ この議論も KV の中ではかなり長い部類に属する。預流 (sotāpatti)・一來 (sakadagāmin)・不還 (anāgāmin) には退転はないが、阿羅漢 (arahant) は阿羅漢果 (arahatta) より退転する (parihāyati) ことがあるか、あるいはないか、というのが議論の内容である。上座部には阿羅漢を絶対視する傾向が強いので退転はないとするで、それに比して、上座部以外の部派は必ずしも阿羅漢の絶対化にこだわらないので、退転ありと主張する<sup>15)</sup>。むしろ正量部も上座部と対立する立場として示される。

## (3)

- ① I-3 Brahmācariya-kathā 梵行論 pp. 93-103。  
 ② 正量部 (Saṃmitiyā, KVA, pp. 39-42)。  
 ③ 正量部が、諸天に梵行住 (道修・出家の2種) はない (n' atthi devesu brahmācariyāvāsa) とするのに対し、上座部はあるとする。

## (4)

- ① I-4 Odhisō-kathā 分断論 pp. 103-109。  
 ② 現在の正量部等 (etarahi Saṃmitiyādayo, KVA, p. 42)。  
 ③ 苦・集・滅・道の四諦の見 (dukkha-dassana, samudaya-d., nirodha-d., magga-d.) によって断じ (jahati) られる煩惱 (kilesa) が異なっており、区分して (odhisodhisō) 断ずると、正量部が主張する。この議論は、II-9 (6) の「漸現観論」と関連する。

## (5)

- ① I-5 Jahati-kathā 捨離論 pp. 109-115。  
 ② 現在の正量部等 (etarahi Saṃmitiyānam, KVA, pp. 42-43)。

(22) Kathāvatthu にみられる正量部の諸説 (池田)

- ③ 上座部が凡夫を低いものと見ているのに対し、正量部は、凡夫 (puthujjana) は欲貧 *kāmarāga* と瞋恚 *byāpāda* を断じ (*jahati*)、伏する (*vikkhambheti*) ということが可能である、と主張する。

(6)

- ① II-9 *Anupubbābhisamaya-kathā* 漸現観論 pp. 212-220。  
② 現在の案達羅派，説一切有部，正量部，賢胄部 (*etarahi Andhaka-Sabbatthivāda-Saṃmitiya-Bhadrayānikānam, KVA, pp. 58-59*)。  
③ 前掲 I-4, (4) の「分断論」と同じ趣意。

(7)

- ① III-5 *Aṭṭhamaka-kathā* 第八人論 pp. 243-247。  
② 現在の案達羅派，正量部 (*etarahi Andhakānañ c' eva Saṃmitiyānañ ca, KVA, p. 67*)。  
③ 第八人 (*aṭṭhamaka puggala, = 預流向 sotāpanna*) の人は見纏 (*diṭṭhipariyuṭṭhāna*) と疑纏 (*vicikicchapariyuṭṭhāna*) とを断捨した (*pahina*) ということができると正量部・案達羅派は主張する。ここでも上座部は、やはり阿羅漢絶対視の立場から、預流を低くみている。

(8)

- ① III-7 *Dibbacakkhu-kathā* 天眼論 pp. 251-254。  
② 現在の案達羅派，正量部 (*etarahi Andhakānañ c' eva Saṃmitiyānañ ca, KVA, pp. 68-69*)。  
③ この(8)と次の(9)は、ほぼ同様の趣旨からなっている。第四定の (*catutthajhāna-, KVA, p. 68*) 法に支えられる肉眼 (*maṃsacakkhuṃ dhammupatthaddham*) は天眼 (*dibbacakkhu*) と名づけられ、ある条件の下では「眼 (*cakkhu*)」はこの二つのみである、と正量部等は主張する。これに対して上座部は、「眼」には肉眼・天眼・慧眼 (*maṃsa-cakkhu, dibba-c., paññā-c.*) の三眼があると主張する。

(9)

- ① III-8 *Dibbasota-kathā* 天耳論 pp. 254-255。  
② [案達羅派，正量部] (*KVA, p. 69*)。  
③ 議論の趣旨は前の(8)と同様であるが、正量部は肉耳 (*maṃsasota*) と天耳 (*dibbasota*) の二を認めるが、やはりある条件の下では肉耳が天耳と呼ば

れる場合があるとして、一つの耳のみをも認める。これに対して上座部は常に肉耳・天耳の二つの耳があるという立場に立つ。

(10)

- ① VII-5 Paribhogamayapuñña-kathā 受用所成福論 pp. 343-347.
- ② 王山部, 養成部, 正量部 (Rajagirika-Siddhatthika-Sammitiyanam, KVA, pp. 97-99).
- ③ 受用によってなる福德 (paribhogamaya puñña) は増大する (vaddhati) か否か, という点について, 例えば施す者 (dayaka) が施し, それを受け取る者 (paṭiggāhaka) が受けた時に, その施物が横取りされたり事故で失われても, やはり福德は増大すると正量部等は主張する。これに対して上座部は, そのような場合の福德を認めない。

(11)

- ① VIII-2 Antarābhava-kathā 中有論 pp. 361-366.
- ② 東山住部, 正量部 (Pubbaseliyānam eva Saṃmitiyānañ ca, KVA, pp. 106-107).
- ③ 正量部等が中有 (antarābhava) の存在を主張する。言うまでもなく, この議論は, (1) の補特伽羅の存在に関する主張と深く関連しているということができよう。この中有の存在は説一切有部などでも認められるが, KVA には示されていない。

(12)

- ① VIII-7 Rūpadhātuyā āyatana-kathā 色界処論 pp. 374-378.
- ② 案達羅派, 正量部 (Andhakānañ c' eva Saṃmitiyānam, KVA, pp. 110-111).
- ③ 正量部等は欲・色・無色の三界のうち, 色界における者にも六処 (saḷayatanika) があると主張。

(13)

- ① VIII-9 Rūpaṃ kamman ti kathā 色業論 pp. 380-394.
- ② 化地部, 正量部 (Mahīsāsakānañ c' eva Saṃmitiyānañ ca, KVA, pp. 111-112).
- ③ 例えば, 善心をひき起こした身業 (あるいは口業) は善色である (kusalena cittena samuṭṭhitam kāyakammaṃ (or vacīkammaṃ) rūpaṃ kusalaṃ), というように正量部等は主張する。KVA では, 身表 (kāya-viññatti) ・語表 (vacī-viññatti) という色 (rūpa) だけが身業・語業であると正量部等が主張していると説明している (p. 111)。

(24) Kathāvatthu にみられる正量部の諸説 (池田)

(14)

- ① Ⅷ-10 Jīvitindriya-kathā 命根論 pp. 394-397.
- ② 東山住部, 正量部 (Pubbaseliyānañ c' eva Saṃmitiyānañ |ca, KVA, pp. 112-113).
- ③ 正量部は, 命根 (jīvitindriya) は心不相応 (cittavippayutta, KVA, p. 112) であり色命根 (rūpa-jīvitindriya) はない, と主張する。上座部は, 色と非色とによって (rūparūpavasena) 二つの命根があるという。

(15)

- ① Ⅷ-11 Kammahetu-kathā 業因論 pp. 398-399.
- ② 東山住部, 正量部 (Pubbaseliyānañ c' eva Saṃmitiyānañ ca, KVA, p. 114).
- ③ 正量部等は, 阿羅漢を誹ぼう (abbhacikkhanti) するという前生 (purimabhava, KVA, p. 114) の業の因 (kammaṣṣa hetu) によって阿羅漢が阿羅漢果より退転する (parihāyati) ことがあると主張する。ただし, 他の業の因によって阿羅漢果から退転することはないとしている。一方, 預流・一來・不還は業の因によってそれぞれの果から退転することはない, としている。ここでも上座部の阿羅漢絶対視の立場と対立する。(cf. (7))

(16)

- ① X-2 Rūpaṃ maggo ti kathā 色道論 pp. 422-424.
- ② 化地部, 正量部, 大衆部 (Mahimsāsaka-Saṃmitiya-Mahāsaṃghikānaṃ, KVA, p. 123)。
- ③ 正量部等は, 八正道のうち, 正語・正業・正命 (sammāvāca-kammantājīva) は色 (rūpa) であると主張。先の (13) の, 身表・語表の色が身業・語業であるという主張と関連していると思われる。

(17)

- ① X-10 Viññatti silan ti kathā 表戒論 pp. 440-441.
- ② 大衆部, 正量部 (Mahāsaṃghikānaṃ c' eva Saṃmitiyānañ ca, KVA, pp. 127-128)。
- ③ 表 (viññatti) が戒 (sila) であるという主張。これも, 前掲 (13) 及び (16) の身表が身業で, 語表が語業であるという思想に裏付けられていると考えられる。

(18)

- ① XI-1 Tisso pi anusaya-kathā 三亦睡眠論 pp. 444-450.
- ② 大衆部, 正量部 (Mahāsaṃghikānañ c' eva Saṃmītiyānañ ca, KVA, p. 129).
- ③ 正量部は, 睡眠 (anusaya) は無記 (abyākata)・無因 (ahetuka)・心不相応 (cittavippayutta) であると主張する。凡夫に善あるいは無記の心が働いているとき, それが原因となって, 睡眠はあるのに現れない。それ故睡眠は心と相応していないという。

(19)

- ① XIV-7 Pariyāpanna-kathā 繫属論 pp. 502-504.
- ② 案達羅派, 正量部 (Andhakānañ c' eva Saṃmītiyānañ ca, KVA, pp. 150-151).
- ③ 欲貪 (kāmarāga) は欲界に付属して欲界繫属 (kāmadhātupariyāpanna) といわれるから, 同様に色貪 (rūparāga)・無色貪 (arūparāga) も, それぞれ色界・無色界に付属して色界繫属 (rūpadhātupariyāpanna)・無色界繫属 (arūpadhātupariyāpanna) であると, 正量部等は主張し, 上座部はこれに反対する。

(20)

- ① XV-11 Kammūpacaya-kathā 業集積論 pp. 520-522.
- ② 案達羅派, 正量部 (Andhakānañ c' eva Saṃmītiyānañ ca, KVA, pp. 156-157).
- ③ 正量部等は, いわゆる業 (kamma) とは異なる, 心不相応 (cittavippayutta)・無記 (avyākata)・無所縁 (anarammana) の, 「業の集積 (kammupacaya)」というものを主張する。要するに業が異熟果を得るまでの間, 集積されて貯えられるものがあるという説である。

(21)

- ① XVI-7 Rūpaṃ kusalākusalan ti kathā 色善不善論 pp. 534-536.
- ② 化地部, 正量部 (Mahimsāsakānañ c' eva Saṃmītiyānañ ca, KVA. pp. 160-161).
- ③ 身業 (kāyakamma)・語業 (vacikamma) に善 (kusala)・不善 (akusala) があるのであるから, 色 (rūpa) もまた善であるとか, あるいは不善であるとか言われるべきである, と正量部は主張する。この議論は, 先の (13) の「色業論」身表・語表という色だけが身業であり, 語業であるという説 (cf. KVA, p. 111) と関連している。

(22)

- ① XVI-8 Rūpaṃ vipāko ti kathā 色異熟論 pp. 536-537.



(26) Kathāvatthu にみられる正量部の諸説 (池田)

- ② 案達羅派, 正量部 (Andhakānañ c' eva Saṃmītiyānañ ca, KVA, p. 161).
- ③ 業がなされて生じた心・心所法 (kammaṣṣa katatta uppanna cittacetasaika dhamma) が異熟 (vipāka) であるのと同様に, 業によって生じた色もまた異熟であると, 正量部等は主張する。

(23)

- ① Ⅷ-7 Jhānantarika-kathā 禅定中間論 pp. 569-572.
- ② 正量部, 一分の案達羅派 (Saṃmītiyānañ c' eva ekaccānañ ca Andhakānaṃ, KVA, pp. 174-175).
- ③ 正量部等は, 初禅と第二禅の中間に (paṭhamassa ca jhānassa dutiyassa ca jhānassa antare) 「禅定中間 (jhānantarika)」と呼ばれるものがあると主張する。

### 3 KV の正量部説の概観

上述のように, KVA の指示するところによると, KV には23種類の正量部の主張が認められる。それらについて, 以下にいくつかの問題点を指摘しつつ概観してみることにはしたい。

まず正量部の主張であると同時に, 同じ説を主張したとされる部派名を表にして示しておこう。

	正 量 部	1	2	③	④	⑤	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
1	安 達 羅 派						○	○	○	○			○							○	○		○	○
2	大 達 羅 部		○														○	○	○					
3	東 山 住 部											○			○	○								
4	化 地 部													○			○						○	
5	犢 子 部	○	○																					
6	有 部		○				○																	
7	賢 胃 部						○																	
8	王 山 部											○												
9	義 成 部											○												
10	外 道	○																						

この表では, とともに同じ説を立てたとされる部派を回数が多い順に配列した。それによると, 案達羅派・大衆部・東山住部がそれぞれ9回, 4回, 3回で回数が多いことになっている。これらの部派はいずれも大衆部系の部派である<sup>16)</sup>。こ

のことからのみ単純に結論すれば、正量部の主張は大衆部系のそれと比較的重なることになる。しかし、もともと上座部の当面の論争相手が大衆部であったことを考え合わせると、正量部の主張が大衆部系のものと類似していたと、単純に言えないことは言うまでもない。

それでは、正量部独自の説とはどのようなものであったのであろう。この表のうち、③④⑤は、それを主張した部派として、KVA が正量部のみ記していることを表わしている。それらは、

(3) I-3 Brahmācariya-kathā 梵行論

(4) I-4 Odhisokathā 分断論

(5) I-5 Jahatī-kathā 捨離論

であるが、これらのうち、(3)の「梵行論」は正量部の説として特徴的なものかもしれないが、筆者にはそれがどのような意味をもつものなのか、明瞭には理解できない。それらに比して、(4)の「分断論」と(5)の「捨離論」は、正量部の主張として大きな比重を占める内容であると思われるので、以下に簡略に述べてみたい。

(4)の「分断論」Odhisokathā は先に示したように、(6) II-9の「漸現観論」Anupubbābhisamaya-kathā と基本的な考え方において軌を一にするものと思われる。即ち、この主張は説一切有部の説として知られる、見四諦所断・修道所断のいわゆる五部 (pañca-prakaraṇaḥ, pañca-nikāyaḥ) の説につながるものである。これは、今日まで比較的豊富に史料が残っていた有部の場合にはよく知られてきたが、正量部もこうした説に依っていたということは、これまであまり注意されることがなかった。

しかし、ここで一つ注意しなければならないのは、KVA において Buddhaghosa がこの説を「現在の正量部等」(etarahi Saṃmitiyādayo) として、「現在の」という限定を附していることである。この限定は、同じく(6)の場合にも附せられている。「現在の」という以上「過去の」正量部というものが存在したことを予想させるのであるが、今はこの etarahi が何を意味するものなのか不明である。

また、この説は、前述の如く、説一切有部の立場と深く関連すると思われるのに、Buddhaghosa は正量部の名前のみを全面に出し、恐らくは「等 (ādayo)」の中に有部を含めてしまってその名を示さないのである。このようなケースは(11)の「中有論 (Antarābhava-kathā)」にもあてはまる。この説も、有部が主張したも

のとしてよく知られるが、KVA には東山住部と正量部のみを挙げて、有部の名を示していない。こうしたことからみて、我々はやはり KVA のもつ限界を見極めて扱わねばならないことを、改めて認識する必要があるであろう。

次に (5) の「捨離論」についてであるが、ここに見られる主張の根底にあるものは、上座部が凡夫を低く評価しようとするのに対して、正量部が凡夫をそれなりに認めようとする姿勢ではないかと思われる。このような態度は、逆の形、即ち、阿羅漢を幾分低く評価しようとする傾向に結び付いている。たとえば、(2) (7) (15) などは、この類型にあてはまるものと考えられる。そして、こうした姿勢は、KV に現れる上座部の対論部派の多くに共通して認められるようである<sup>17)</sup>。

次に、正量部の行なり最も顕著な主張についてここでみることにしよう。言うまでもなくそれは、KV の冒頭に掲げられる「補特伽羅 (puggala, pudgala)」の存在に関する議論である。いまはその詳細な内容には立ち入らないが<sup>18)</sup>、この主張が正量部の立脚点を示す、極めて重要な説であることは、疑う余地がない。同時に、この主張は上座部にとっても、自らの立場を揺るがしかねないような危険なものであった。それ故、KV はこれを論の冒頭に置き、しかも最も綿密な議論を行なっているのである。

仏教の内部で最初に補特伽羅の存在を主張したのは、犢子部 (Vajjiputtaka) であるが、正量部はその系統を引く部派として、同じくこれを立宗の根拠にしていたと思われる。しかし、この説は、後世、「附仏法中外道」といわれるほど危険な思想であった。また、実際 KVA においてもこの説を唱えたものとして、「仏教以外の多数の外道 (bahiddhā ca bahū aññatitṭhiyā)」を示している。要するにこの説は、輪廻の主体というようなものを想定しているのであり、仏教が否定している「我 (attan, ātman)」の存在の容認に容易に結び付きかねないのである。

KV における論争も、正量部はそのことを十分知りぬいて行なっているので、非常に神経を使っている。例えば、上座部が「補特伽羅はこの世界からかの世界へ、かの世界からこの世界へ転生するのか<sup>19)</sup>」と問うのに対し、「そうだ」と答えながら、続いてなされる同様の質問には、「そうではない」と答えている。即ち、犢子部・正量部は、三友氏も指摘されているように<sup>20)</sup>、外道のいう「我 (attan, ātman)」と自らの説く「補特伽羅 (puggala, pudgala)」とを同一に見られることを最も恐れたのである。それだけこの思想は危険性を伴ったものであり、彼ら

もまたそのことを熟知していたのである。それでもなお彼らをして、このような主張をするようにさせたものが何であるか、という問題はきわめて重大な内容を含んでいると考えられるが、いずれ機会を改めて論じてみたい。

これと関連し、また軌を一にする議論は、(11)の「中有論」、(14)の「命根論」、更には(18)の「三亦随眠論」、(20)の「業集積論」がある。すなわち、こうした生命の実体のようなものを前提にする考えかたは、この部派の思想の多くの部分に種々の形で反映されているのである。

最後にもう一つ、正量部に特徴的な傾向は、(13)「色業論」、(14)「命根論」、(16)「色道論」、(17)「表戒論」、(21)「色善不善論」、(22)「色異熟論」等に見られる、色 (rūpa) の重視である。さらにそれが、業や戒の問題と結び付いていくのである。こうした方向性が、前述の「補特伽羅」論などの立場と深く関連していることは言うまでもない。

以上、極めて雑駁に概括してみたが、KVにおいて抽出される正量部説だけでも、かなり多岐にわたって様々な議論があることが知られた。しかしながら、KVAを通して知られる情報は、あくまで5世紀の Buddhaghosa の知識と彼の立場を経たものであることは、忘れてはならない。だが、翻って見直してみると、KVの成立した時代に、すでに補特伽羅の存在を主張する部派が仏教の内部に在ったということは十分注意されなければならない。このような思想は、何等かの生命的個体を想定するという点において、後世の如来蔵思想などと同一の方向性を有するものだからである。そして、そうした主張を行なった部派が、何ゆえ4, 5, 6世紀と次第に勢力を増大していったのか<sup>21)</sup>、またそれが後期の大乗仏教とどのように関連しているのか、など今後検討すべき点が少なくないように思われる。

### 註

- 1) 玄奘の旅程についての詳細な検討は、桑山正進・袴谷憲昭『玄奘』(1981年12月、大蔵出版社)の桑山氏の論述(pp. 11-151)に詳しい。
- 2) 平川彰『初期大乘仏教の研究』(1969年3月、春秋社)、pp. 704-717参照。
- 3) 『南海寄帰内法伝』巻一、大正54, 205 a-b. 「羅荼・信度にては則ち少しく三部(大衆部・上座部・根本説一切有部)を兼ねるも、乃至、正量もっとも多し」
- 4) 静谷正雄『小乗仏教史の研究』(1978年7月、百華苑) p. 221。
- 5) 静谷前掲書には「正量部は驚くべき発展」を示したことが述べられ(p. 228)、『西域記』の記述に基づくならば、「中インドの主要仏跡はほとんど正量部の独占的管理下に

(30) Kathāvatthu にみられる正量部の諸説 (池田)

あったことが知られ、「正量部の勢いは有部を制圧するほどの強力さ」であったことが述べられている (p. 229).

- 6) 山口益『月称造, 中論釈』二卷 (1968年2月, 清水弘文堂) p. 72 参照。cf. 吉元信行『アビダルマ思想』(1982年3月, 法蔵館) pp. 28-30.
- 7) A. Bareau: *Les sectes Bouddhiques du petit véhicule*, Publications de l'école Française d'extrême-orient, Vol. XXXVIII, pp. 15-27, 33 etc. 静谷前掲書, pp. 11-31, 214-233 etc.
- 8) Yaśomitra: *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā*, ed. by U. Wogihara, 1936. Tokyo, p. 699. "Vātsīputrīyā Ārya-Sāṃmatīyāḥ". etc.
- 9) 平川彰『律蔵の研究』(1960年9月, 山喜房仏書林) p. 262. 参照。
- 10) 慈恩大師の『妙法蓮華経玄賛』巻一本 (大正34, 657a) には『舍利弗阿毘曇論』三十卷 (大正 No. 1548) を正量部の論としている。しかし, その説には疑問が多く, 水野弘元博士は, この論を法蔵部の所属であるという立場をとられる (「舍利弗阿毘曇論について」『金倉博士古稀記念印度学仏教学論集』(1966年10月, 平楽寺書店), pp. 109-134)。
- 11) *Kathāvatthu*, vols. I, II, PTS 1894, 1897. 『論事』1, 2. 佐藤密雄・佐藤良智訳 (『南伝大蔵経』第57・58巻 (1939年9月, 10月). *Points of Controversy or Subjects of Discourse*, trsl. by Shwe Zan Aung and Mrs. Rhys Davids, PTS 1969.
- 12) *Kathāvatthu-ppakaraṇa-Atthakathā*, ed. by T. W. Rhys Davids, JPTS 1889. *The Debates Commentary*, trsl. by Bimala Churn Law, PTS 1969.
- 13) Bimala Charan Law: *The Life and Work of Buddhaghosa*, Calcutta Oriental Series, No. 9. E. 3., Calcutta 1923. 森祖道『パーリ仏教註釈文献の研究』(1984年2月, 山喜房仏書林) pp. 469-529 参照。
- 14) 『論事』序文 p. 3. 参照。
- 15) 筆者はかつて KV における煩惱論を整理したことがあるが, その際やはり同様の点について指摘しておいた。(「*Kathāvatthu* における煩惱論」『曹洞宗研究員研究生研究紀要』第15号, pp. 31-32.)
- 16) 静谷前掲書, pp. 53-111, 他参照。
- 17) 前註 (15) 参照。
- 18) 坂本幸男「犢子部の有我説とその論難」『阿毘達磨の研究』(1981年11月, 大東出版社) pp. 301-316. 三友健容「「我」を主張した部派」(一)(二)(三), 『国訳一切経・三蔵集』第三輯 (1978年3月, 大東出版社) pp. 125-152. 他参照。  
犢子部の補特伽羅説について最もまとまった形で示している論書は, やはり Vasubandhu (世親) の *Abhidharmakośabhāṣya* (『俱舍論』) の「破我品 (Pudgala-nirdeśa)」であろうが, その説の影響を受けて著わされているのが, *Tattvasaṅgraha-Pañjika*, (Bauddha Bharati Series, 1, 2, Varanasi 1968) にみられる補特伽羅の解説 (pp. 1189-

1232) である。cf. 内藤昭文「TSP におけるアートマン説批判 (Ⅱ) ——ブドガラ説をめぐって (1) ——」『印仏研』33-1, pp. 140-141. またその (2) 『仏教学研究』第41号, pp. 20-51.

19) “Puggalo sandhāvati asmā lokā paraṃ lokam parasmā lokā imaṃ lokan ti ? Āmantā. So puggalo sandhāvati asmā lokā paraṃ lokam parasmā lokā imaṃ lokan ti ? Na h’evaṃ vattabbe....” (KV, p. 28)

20) 三友前掲論文, p. 152.

21) 平川彰博士は、「正量部がしだいに盛大になったのは、正量部がアートマン (pudgala 補特伽羅, 人我) を認め、インドの伝統説と共通点があったためかもしれない。」と述べておられる (『インド仏教史』上巻 (1974年9月, 春秋社) p. 166).